

# 北魏法難の実態解明について

春本秀雄

## はじめに

論者には多くの「北魏法難の研究」についての論考がある。先に「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時について―」（二〇〇七年（平成十九年）三月『大正大学研究紀要』第九十二輯）があり、ここに、北魏法難の原因、理由についての既存の定説とは異なる、新説である春本説の提示が一応、完結した。次には、この春本説と従来の定説、諸説との相違を明確にして、その妥当性を論じ、春本説を定説化する段階があると考えている。この意に於いて、本論考に於いては「北魏法難の実態解明について」と題して、論者がこれまでに未聞未見だった諸研究文献資料をもとに、新説である春本説を明確にして、ここにその説の妥当性を論じてみたい。

## 一叙

藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』（白帝社 二〇〇四年十月一日 白帝社アジア史選書〇〇五<sup>①</sup>）の八・九頁に次のようにある。「……世に「三武一宗の法難」という、中国の仏教史をいろどった大事件がある。北魏の世祖太武帝の太平真君七年（四四六）三月「諸州に詔して沙門を坑めにし、諸の仏像を毀つ」たのをはじめ、北周の武帝の建徳三年（五七四）、唐武宗の会昌四年（八四五）の三武に加え、五代後周の世宗による一宗、この計四回の廃仏を指している。それぞれに事情もことなれば内容、規模にも相当の違いがある。……鮮卑族がたてた北魏の、太武帝によってひき起こされた廃仏は、儒教にもとづく政治を理想とし、人一倍の仏教嫌いであろうした門閥出身の宰相崔浩が、天師道教の寇謙之と手をむすんで太

武帝を籠絡し、太平真君の元号からも分るるように、道教君主に仕立てあげた成果である。根こそぎの廃仏には反対であったという天師寇謙之が二年ご、にわかに死んでから、さらに二年ごの太平真君十一年(四五〇)六月には、国史問題で首謀者の崔浩までが太武帝の逆鱗にふれ、一族はおろか蘆氏、郭氏、柳氏など姻戚関係にある名族たち、さらに郎党二八人もろとも極刑に処せられた。「宰相の身で、これほどまでに凌辱をうけて誅戮された例はなく、世間ではもつぱら破仏の応報だとうわさしあつた」という。また崔浩を処刑した太武帝も二年ごの興安元年(四五二)二月、宦官に暗殺され、これも罪業のむくいだとささやかれた。それほどまでの悪評を巻きおこし、仏教徒に衝撃をあたえ反感を招いた最初の廃仏棄釈も、徹底的に破壊されたように記されているわりには、どれほどの寺院が毀たれ、僧尼が還俗となつたかは一切が不明なのである。当時の北魏は山東・河南まで制圧していたけれども、都がはるか北辺の平城、現在の山西省大同に置かれていたことを思えば、具体的には疑問が残るのである。……(後周世宗の廃仏は)三武の法難に共通して認められる儒・道両教の影がなく、あくまでも政治・経済・社会問題に終始しており、教団の肅清が目的であつたことは間違いない。……」とある。ここで、「鮮卑族がたてた北魏の、太武帝によつてひき起こされた廃仏は、儒教にもとづく政治を理想とし、人一倍の仏教嫌いであつた門閥出身の宰相崔浩が、天師道教の寇謙之と手をむすんで太武帝を籠絡し、太平真君の元号からも分るるように、道教君主に仕立てあげた成果である。」とあるが、果たしてそのように言つていいものなのであろうか。更に、「それほどまでの悪評を巻きおこし、仏教徒に衝撃をあたえ反感を招いた最初の廃仏棄釈も、徹底的に破壊されたように記されているわりには、どれほどの寺院が毀たれ、僧尼が還俗となつたかは一切が不明なのである。当時の北魏は山東・河南まで制圧していたけれども、都がはるか北辺の平城、現在の山西省大同に置かれていたことを思えば、具体的には疑問が残るのである。」とあるが、果たしてどの程度まで廃仏の様相を知り得る事が可能であらうか。更に、「(後周世宗の廃仏は)三武の法難に共通して認められる儒・道両教の影がなく、あくまでも政治・経済・社会問題に終始しており、教団の肅清が目的であつたことは間違いない。」とあるが、果たして、「三武の法難に共通して認められる儒・道両教の影」とは一体どのようなものなのであろうか。更に、論者にとつて平成二十年四月以前に未聞未見であつた近年の中国の論文と春本説との比較検討をして、春本説の妥当性について述べてみたい。

以上の如くの北魏法難の実態説明についての論考をここに試みてみたい。

## 二 「三武一宗の法難」と「北魏の法難」

先ず、「三武一宗の法難」と「北魏の法難」について述べてみたい。

中国仏教史上、四回の廃仏が行なわれた。①北魏、太武帝、太延四年(四三八)、太平真君五年(四四四)、太平真君七年(四四六) ②北周、武帝、

建徳三年（五七四）③唐、武宗、会昌五年（八四五）④後周、世宗、顯徳二年（九五五）である。①北魏の太武帝の廃仏は、太武帝、崔浩、寇謙之の三者の力関係の上に行われた。崔浩は儒者であり、寇謙之は道士である。崔浩は中華思想により、寇謙之は対仏教と言うことから廃仏に肯定的な考えを持つと考えられる。しかし、太武帝は仏教を内包した道教である寇謙之の新天師道の道教君主である。従って、崔浩が廃仏を進言すれば、崔浩は失脚させようと太武帝は考える。仏教を内包した道教である新天師道の寇謙之は完膚なきまでの廃仏には肯定はできない。従って、崔浩、寇謙之に完膚なきまでの廃仏断行の根拠を求めることはできない。武功第一の太武帝にとっては「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の図讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「謠言—図讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、図讖禁絶と連携して廃仏は行われた。②北周の武帝の廃仏は、張賓（道士）・衛元嵩（還俗僧）が立役者である。武帝は「黒衣當王」の図讖に類する讖言により仏教を嫌っていた。張賓は「以黒積為苦國忌、以黄老為國祥。」とし、衛元嵩も張賓と同様に共に進言した。武帝は天和二年（五六七）より建徳三年（五七四）の廃仏令を出すまで、有徳の衆僧、名儒道士、文武百官に三教の優劣を論じさせた。張賓・智炫の論争を経て、仏教も道教も廃棄された。③唐の武宗の廃仏は、趙歸真（道士）・李徳裕（宰相）が立役者である。武宗は会昌六年（八四六）に仙菓を飲んで亡くなった。それほど武宗は道教を尊信していた。従って、仏教を廃棄したいと言う考えが固よりあった。道士、趙歸真の「孔子説云。李氏十八子。昌運方盡。便有黒衣天子。理国。（唐朝は十八代で昌運が尽きて黒衣の天子になるであろう）」（円仁撰『大唐求法巡礼記』巻第四（大日本仏教全書第七十二巻 史伝部十一 125頁下 遊方伝叢書第1246頁上）との図讖をも武宗は受け入れ廃仏が行われた。④後周の世宗の廃仏は、前者の三つの廃仏とは異なり、廃仏の理由に儒・佛・道の思想的連関、しがらみはない。主に僧侶の墮落・経済的な理由により世宗の富国強兵策として廃仏と言うよりも仏教統制が行われた。尚、「三武一宗の法難」の称谓の初出は不明。「三武一宗」なら「二武二宗」でも可とすべき。論理的には本来は「三武一世の法難」とすべき。因みに、宋、張商英の『護法論』に「三武、佛祖統紀」四二に四時の廃仏の事が述べられている。

上記の如くに、「三武の法難」には、①北魏、太武帝……寇謙之（道士・謠言（図讖）。②北周、武帝（建徳三年（五七四））……張賓（道士）・讖言（図讖）。③唐、武宗（会昌五年（八四五））……趙歸真（道士・図讖）のように、奇しくもそれぞれに「道士・図讖」との関係があった。つまり、「道士」は「道教」、「図讖」は「儒教」との関係があるのである。「北周・唐の法難」に較べて「北魏の法難」についての論考が多く論者には存在する。「北魏の法難」は太武帝、崔浩（儒者）、寇謙之（道士）の三者の力関係の上に廃仏が行われたのであり、儒・道両教の影響のもとに廃仏が行われた事は否定し難い事実である。しかし、前述の藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』（白帝社 二〇〇四年十月一日 白帝社アジア史選書〇〇五）の八頁の如く、「鮮卑族がたてた北魏の、太武帝によってひき起こされた廃仏は、儒教にもとづく政治を理想とし、人一倍の仏教嫌いであった門閥出身の宰相崔浩が、天師道教の寇謙之と手をむすんで太武帝を籠絡し、太平真君の元号からも分るように、道教君主に仕立てあげた成果である。」と言うのは問題があると考えている。何故ならば、北魏太武帝の廃仏は、為政者である太武帝に廃仏の思想がなく、仏教を内包した世界観を持つ新天師道

の信仰者である太武帝は、どちらかと言えば仏教養護派なのであるから、側近の崔浩がいくら廃仏、廃仏と唱えてみても、それが易々と受け入れられるものではない。逆に、廃仏を崔浩が太武帝に進言すれば進言する程、太武帝にとつてはその言を受け入れるよりも崔浩を失脚させようとする方向に気持ち傾くはずである。そのような関連があるにもかかわらず崔浩の進言の通りに廃仏が行われたのは、その進言を聞き入れた太武帝に崔浩の進言以外に廃仏断行の強い理由、意思があつたからに他ならない。つまり、それは何か、と尋ねることを太武帝、崔浩、寇謙之の考え方を明確にして、それぞれの關係を考え、突き詰めていくと、武功第一の太武帝にとつては、「魏を滅ぼすものは呉である」の謠言が許せなかつたというところに行き着く。蓋異と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきはずであるが、一寺院だけに止まらず、仏教全てを廃棄したのは崔浩の進言があつたとは言うもののそれが決定的な理由ではない。仏教を内包した世界觀を持つ新天道を信仰する君主であつた太武帝が廃仏の断を下したのであり、それは太武帝自身の武功を第一に考える太武帝の決断によつてなされたのである。ここに廃仏の行われた真の決定的理由があるのである。崔浩の進言により廃仏が行われたのではなく、太武帝自身に廃仏を行わなければならぬ理由があつたので廃仏が行われたのである。つまり、太武帝の側近である崔浩は太武帝の廃仏断行の後押しをした形なのである。従つて、上述の藤善眞澄先生のようにだけ言うのは問題があり、正鵠を得ていないと言わなければならない。

### 三 北魏法難の様相

北魏法難の様相は如何様であつたのか、ここに述べてみたい。  
北魏の法難は都合、三回<sup>①</sup>行われたと考えられる。

(一) 太延四年(四三八)……太武帝が五十歳以下の沙門の還俗を命じた。(『魏書』卷四上、世祖紀第四上・『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年)……これは、『魏書』卷四上、世祖紀第四上に、「(太延四年)癸未、罷沙門五十已下。」とある。更に、『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年に、「(元嘉十五年)三月、癸未、魏主詔罷沙門年五十以下者。(胡三省注…以其強壯、罷使為民、以從征役)」とある。太延四年は劉宋の元嘉十五年と同年であり、四三八年である。このように、四三八年に五十才以下の僧侶の還俗を命じたのである。……役・租調との關係。

(二) 太平真君五年(四四四)……太武帝が沙門・師巫(巫覡)の妖怪の言を禁じ、更に沙門・師巫(巫覡)の私養を禁じた。(『魏書』卷四下、世祖紀第四下・『資治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年)……これは、『魏書』卷四下、世祖紀第四下に、「戊申、詔曰、『愚民無識、信惑妖邪、私養師巫、扶感讖記、陰陽、凶緯、方伎之書、又沙門之徒、假西戎虛誕、生致妖孽。非所以壹齊政化、布淳德於天下也、自王公已下至於庶人、有私養沙門、師巫及金銀工巧之人在其家者、皆遣詣曹、不得容匿。限今年二月十五日、過期不出、師巫、沙門身死、主人門誅。明相宣告、咸使聞知。』」とある。更に、『資

治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年に、「(嘉二十一年) 戊申、魏主詔、『王、公以下至庶人、有私養沙門、巫覡於家者、(胡三省注：男曰巫、女曰覡、覡、刑狄翻) 皆遣詣官曹、過二月十五日不出、沙門、巫覡死、主人門誅。』(胡三省注：門誅者、闔門尽誅之)」とある。このように、太平真君五年(四四四)に太武帝が沙門・師巫(巫覡)の妖怪の言を禁じ、更に沙門・師巫(巫覡)の私養を禁じた。師巫は讖記、陰陽、図緯、方伎の書に精通しており、妖孽を生致するもので、教化を一齐にし、淳徳を天下に布くものではないとして、図讖、緯書を禁絶したのである。……廃仏・図讖禁絶。

(3) 太平真君七年(四四六)……太武帝が堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡経をみな撃破焚焼すべきこと、及び沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じた。(『魏書』卷百十四、釈老志、太平真君七年三月・『高僧伝』卷十曇始伝(大正五十・三九二中)……これは、『魏書』卷百十四、釈老志、太平真君七年三月に、「自今以後、敢有事胡神及造形像泥人、銅人者、門誅。雖言胡神、問今胡人、共云無有。皆是前世漢人無頼子弟劉元真、呂伯強之徒、接乞胡之誕言、用老莊之虛假、附而益之。皆非真矣。至使王法廢而不行。蓋大姦之魁也。有非常之人、然後能行非常之事。非朕孰能去此歷代之偽物。有司宣告征鎮諸軍、刺吏、諸有仏図形象及胡経、尽皆撃破焚焼、沙門無少長悉坑之。」とある。このように、太平真君七年(四四六)に堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡経をみな撃破焚焼すべきこと、及び、沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じたのである。更に、『高僧伝』卷十曇始伝(大正五十・三九二中)に、「燾既惑其言、以偽太平七年、遂毀滅仏法。分遣軍兵燒掠寺舎、統内僧尼悉令罷道。其有竄逸者、皆遣人追捕、得必梟斬。一境之内無復沙門。」とある。ここに、「軍兵を分遣して寺舎を燒き掠奪し、僧尼は悉く還俗せしめ、もし逃げかくれた者があれば、追捕してさらし首にした。一境の内、また沙門なし。」とあるように、北魏太武帝の廃仏が如何に完膚なきまでのものであつたのかを知ることができる。……廃仏。

以上の事から、前述の藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 彈圧の狭間にて』(白帝社 二〇〇四年十月一日 白帝社アジア史選書〇〇五)の八・九頁に、「それほどまでの悪評を巻きおこし、仏教徒に衝撃をあたえ反感を招いた最初の廃仏棄釈も、徹底的に破壊されたように記されているわりには、どれほどの寺院が毀たれ、僧尼が還俗となつたかは一切が不明なのである。当時の北魏は山東・河南まで制圧していたけれども、都がはるか北辺の平城、現在の山西省大同に置かれていたことを思えば、具体的には疑問が残るのである。」とあるが、上記に述べた事から、「徹底的に破壊された」と理解することが妥当であると本論考に於いて論者は考える。しかし、藤善眞澄先生の御指摘も一理はあるとは考えている。

春本の新説は『宋書』索虜伝に、「先是虜中謠言、『滅虜者呉也。』燾甚惡之。二十三年、北地瀘水蓋呉、年二十九、於杏城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。燾聞呉反惡其名、累遣軍撃之輒敗。」とあり、これを根拠として立説している。南朝宋、文帝の元嘉二十三年、四四六年は北朝北魏、太平真君七年に相当する。「虜」とは『漢語大詞典』(汉语大词典出版社 一九九七年)五〇八五頁に、「古时对北方外族或南人对北方人的蔑称。」とある。更に、「謠言」とは讖言、緯書の類であり、つまりは図讖である。従つて、「虜(北魏)」を滅ぼすものは「蓋」呉「である」との「謠言(図讖)」を「燾(太武帝)」は甚だ憎んだのである。北魏の法難は、太武帝、崔浩、寇謙之の三者の思想を十分に把握して廃仏の真相を考えなければなら



ない。春本の新説では次の如く考える。北魏太武帝の廢仏は、為政者である太武帝に廢仏の思想がなく、仏教を内包した世界觀を持つ新天師道の信仰者である太武帝は、どちらかと言えば仏教養護派なのであるから、側近の崔浩がいくら廢仏、廢仏と唱えてみても、それが易々と受け入れられるものではない。逆に、廢仏を崔浩が太武帝に進言すれば進言する程、太武帝にとってはその言を受け入れるよりも崔浩を失脚させようとする方向に気持ち傾くはずである。そのような関連があるにもかかわらず崔浩の進言の通りに廢仏が行われたのは、その進言を聞き入れた太武帝に崔浩の進言以外に廢仏断行の強い理由、意思があつたからに他ならないのである。つまり、それは何か、と言うことを太武帝、崔浩、寇謙之の考え方を明確にして、それぞれの關係を考え、突き詰めていくと、武功第一の太武帝にとっては、「魏を滅ぼすものは呉である」の謠言が許せなかつたというところに行き着く。蓋呉と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきはずであるが、一寺院だけに止まらず、仏教全てを廢棄したのは崔浩の進言があつたとは言うもののそれが決定的な理由ではない。仏教を内包した世界觀を持つ新天師道を信仰する君主であつた太武帝が廢仏の断を下したのであり、それは太武帝自身の武功を第一に考える太武帝の決断によつてなされたのである。ここに廢仏の行われた真の決定的理由があるのである。崔浩の進言により廢仏が行われたのではなく、太武帝自身に廢仏を行わなければならない理由があつたので廢仏が行われたのである。つまり、太武帝の側近である崔浩は太武帝の廢仏断行の後押しをした形なのである。先の『宋書』索虜伝に南朝宋、文帝の元嘉二十三年、四四六年に「燾（太武帝）」は蓋呉を敗つたとある。従つて、〈(2) 太平真君五年(四四四)〉や〈(3) 太平真君七年(四四六)〉に、〈虜(北魏)を滅ぼすものは(蓋)呉である〉との「謠言(凶讖)」を「燾(太武帝)」は甚だ憎んだので廢仏が行われたと春本説では考える。そして、〈(1) 太延四年(四三八)〉は『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年(元嘉十五年)三月、癸未、魏主詔罷沙門年五十以下者。(胡三省注：以其強壯、罷使為民、以從征役)とあるように、胡三省の注に、「以其強壯、罷使為民、以從征役」とある如く、太武帝が征役(賦税と徭役。租税と義務労働)の為に五十歳以下の沙門の還俗を命じたのだと考える。

#### 四 春本説と中国の説

##### (一) 春本説

これまでの論者の説である「北魏法難についての新説(春本説)」を述べると次の如くである。  
春本説を立説形成するのに用いた日本、中国の諸研究文献は次の如くである。

日本

- ① 久保田量遠著『支那儒道仏三教史論』（東方書院 一九三二年（昭和六年））
- ② 塚本善隆「北魏太武帝の廃仏毀釈」（『支那仏教史学』一—四 一九三七年（昭和十二年））
- ③ 塚本善隆「中国の仏教迫害（三武一宗の廃仏）」（『講座仏教Ⅳ中国仏教』大蔵出版株式会社 一九五八年（昭和三十三年））
- ④ 横超慧日「北魏仏教の基本的課題」（横超慧日編『北魏仏教の研究』平楽寺書店 一九七〇年（昭和四十五年））
- ⑤ 安居香山「漢魏六朝時代における図讖と仏教——特に僧伝を中心として——」（安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会 一九七六年（昭和五十一年））
- ⑥ 佐藤智水「北魏廃仏論序説」（岡山大学法文学部学術紀要史学篇）三十九 一九七九年（昭和五十四年））
- ⑦ 鎌田茂雄『中国仏教史』第三卷（東京大学出版会 一九八四年（昭和五十九年））第四章 北魏の仏教 第二節 北魏の仏教
- ⑧ 松丸道雄他編『世界歴史体系 中国史 三国〜唐 2』（山川出版社 一九九六年（平成八年））第三章 南北朝 2 北朝の政治（窪添慶文）
- ⑨ 串田久治著『中国古代の「謠」と「予言」』（創文社 一九九九年（平成十一年））
- ⑩ 野上俊静・小川貫式・牧田諱亮・野村耀昌・野村達玄著『仏教史概説 中国篇』（平楽寺書店 一九六六年（昭和四十三年））第四章南北朝の仏教—教団の発展と儒道二教—9 北魏太武帝の廃仏
- ⑪ 平川彰著『インド 中国 日本 仏教通史』（春秋社 一九七七年（昭和五十二年））第三章中国仏教 二 羅什及び南北朝の仏教 国家と仏教 中国
- ① 杜士銓主編『北魏史』（山西高校聯合出版社 一九九二年（平成四年））（楊国勇）
- ② 任継愈主編『定本 中国仏教史Ⅲ』（中国社会科学出版社 一九八八年（昭和六十三年））柏書房 一九九四年（平成六年）
- ③ 鄭利安編著『魏晋南北朝史研究論文書目引得』（台湾中華書局印行、中華民國七四年、一九八五年（昭和六十年））
- ④ 呂宗力（訳 李雲・中村敏子）『両晋南北朝より隋に至る図讖を禁絶する歴史の真相』（『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』汲古書院 一九九六年（平成八年））

以上の諸研究文献資料をもとに新説である春本説を構築した。その新説である春本説の「北魏法難の研究」関係の諸論文<sup>12</sup>の主張を纏めて述べると次の如くである。

安居香山先生の論文に「漢魏六朝時代における図讖と仏教——特に僧伝を中心として——」（安居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』国書刊行会、一九七六年（昭和五十一年））がある。ここに、①北魏、太武帝（太延四年（四三八）、太平真君五年（四四四）、太平真君七年（四四六）、②北周、武帝（建德三年（五七四）、③唐、武宗（会昌五年（八四五）、④後周、世宗（顯徳二年（九五五）、の所謂「三武一宗」の法難の第一番目に相当する

北魏、太武帝の廃仏は、凶讖の禁絶をも兼ねていたことが述べられている。安居先生は前掲の論文「漢魏六朝時代における凶讖と仏教―特に僧伝を中心として―」の中で次のように述べられている。「師巫達と同様、沙門達も又何等かの徴驗的呪術的行為を為し、その為には凶讖方伎の書等にも依つた事だろう。そうした事が、社会人心に与える害悪は数多かつたものと考えられ、こうした禁止の詔が出されたものと考えられる。」として仏教の僧侶と凶讖との関係を述べ、更に「太平真君七年の廃仏なども、漢族士大夫階級の崔浩の政治的進出、と言う直接原因はあつたとしても、又こうした沙門達の墮落も、一遠因となつた事であろう。」と廃仏が「主」で凶讖禁絶が「従」、であるとして北魏太武帝の廃仏と凶讖禁絶の関係について述べられている。従来、北魏太武帝の廃仏については塚本善隆博士の論文「北魏太武帝の廃仏毀釈」（『支那仏教史学』一―四 一九三七年（昭和十二年））、『塚本善隆著作集』第二卷第二章）に「北魏太武帝の廃仏の中心人物は崔浩である」旨述べられている。安居先生も「太平真君七年の廃仏なども、漢族士大夫階級の崔浩の政治的進出、と言う直接原因……」と述べて塚本先生の説を「是」として述べられている。更に、横超慧日博士の論文「北魏仏教の基本的課題」（横超慧日編『北魏仏教の研究』平楽寺書店 一九七〇年（昭和四十五年） 第一篇 思想編）にも、「たまたま蓋呉の反を以て関中が騒動した機会に、沙門が蓋呉と通謀しているのではないかとの嫌疑から、教団に対して大弾圧が加えられる端緒が作られた。かねて帝室に帰依せられていた道教の中に道士寇謙之という人物が現われ、且つこれを信奉する司徒崔浩が排仏論を主張したため、禍乱平定に急なる太武帝の心はこれによつて動かされた。そしてその結果が、仏教の虚誕妖孽という非難により定着後日なお浅い信仰界に一大衝撃を与える大事件となつたのであつて、沙門は少長となく悉く之を坑にせよという詔となつて現実化したのである。時に太平真君七年（四四六）のことであり、これが史上三武一宗の法難と言われる第一次の廃仏事件である。」とあり、崔浩が排仏論を主張したために太武帝の心は動かされ廃仏事件がおきたのだとしている。これも塚本先生の説を「是」として踏まえて述べている。更に、鎌田茂雄博士著『中国仏教史』第三卷 東京大学出版会 一九八四年（昭和五十九年） 第四章、北朝の仏教、第二節、北魏の廃仏）に、「廃仏を進言し、それを推進した中心人物は崔浩であつた」、「崔浩が太武帝に推薦し、太武帝をして道教を重んじる天子に変え、廃仏に踏みきらせるために利用されたのが寇謙之である」とある。鎌田先生も塚本先生、安居先生や横超先生と同様に考えているのである。しかし、そうであろうか。何故ならば、次のように考えるからである。為政者である太武帝に廃仏の思想がなく、仏教を内包した世界観を持つ新天師道の信仰者である太武帝は、どちらかと言えば仏教護護派なのであるから、側近の崔浩がいくら廃仏、廃仏と唱えてみても、それが易々と受け入れられるものではない。逆に、廃仏を崔浩が太武帝に進言すれば進言する程、太武帝にとってはその言を受け入れるよりも崔浩を失脚させようとする方向に気持ち傾くはずである。そのような関連があるにもかかわらず崔浩の進言の通りに廃仏が行われたのは、その進言を聞き入れた太武帝に崔浩の進言以外に廃仏断行の強い理由、意思があつたからに他ならないのである。つまり、それは何か、と言うことを崔浩、寇謙之、太武帝の考え方を明確にして、それぞれの関係を考え、突き詰めていくと、武功第一の太武帝にとつては、「魏を滅ぼすものは呉である」の謠言が許せなかつたというところに行き着く。蓋呉と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきはずであるが、一寺院だけに止まらず、仏教全てを廃棄したのは崔浩の進言があつ



たとは言うもののそれが決定的な理由ではない。仏教を内包した世界観を持つ新天師道を信仰する君主であった太武帝が廃仏の断を下したのであり、それは太武帝自身の武功を第一に考える太武帝の決断によつてなされたのである。ここに廃仏の行われた真の決定的理由があるのである。崔浩の進言により廃仏が行われたのではなく、太武帝自身に廃仏を行わなければならない理由があつたので廃仏が行われたのである。つまり、太武帝の側近である崔浩は太武帝の廃仏断行の後押しをした形なのである。従つて、「北魏太武帝の廃仏の中心人物は崔浩ではなく、太武帝自身である。」と言わなければならないのである。

中国に於いては、鄭利安編著『魏晋南北朝史研究論文書目引得』（台湾中華書局印行 中華民國七四年 一九八五年（昭和六十年））には北魏法難の研究論文はない。杜士鉉主編『北魏史』（山西高校聯合出版社、一九九二年（平成四年）（楊國勇）、任繼愈主編『定本 中国仏教史Ⅲ』（中国社会科学出版社 一九八八年（昭和六十三年） 柏書房 一九九四年（平成四年））によれば、北魏太武帝の廃仏の原因の一つは仏道二教の対立によるものであると捉えている。日本に於いては、塚本先生の論文「北魏太武帝の廃仏毀釈」により、安居先生の論文「漢魏六朝時代における図讖と仏教―特に僧伝を中心として―」、横超先生の論文「北魏仏教の基本的課題」、鎌田先生の著書『中国仏教史』第三卷、等々、現行の諸論文、諸書に「廃仏の中心人物は崔浩である」として述べられており、廃仏の原因の一つとしての仏道二教の対立は、あまり、鮮明には謳われてはいない。拙論においては、北魏太武帝の廃仏は、仏道二教の対立によるものでもなければ、廃仏の中心人物は崔浩でもないと考えている。つまり、廃仏の原因の一つが仏道二教の対立構造というのは間違いである。何故ならば、太武帝は寇謙之を信仰しており、寇謙之は仏教廃棄に反対の考え方を持っていたからである。また、漢人宰相の崔浩の進言も廃仏断行の理由の一つである、とは拙論でも考えてはいるのではあるが、塚本善隆博士の説のように、「廃仏の中心人物は崔浩である」としては説明のつかないことが生じてしまう。つまり、仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道を尊信する北魏太武帝にいくら廃仏を崔浩が進言してみても聞き入られるはずはないのであり、廃仏を崔浩が進言すれば進言する程、崔浩を失脚させようとする方向に太武帝の気持は傾いてしまうのである。従つて、「廃仏の中心人物は崔浩である」とは言えないのである。上述の拙論の主張は、先の、中国や日本の従来の説に対して、新説を提示するものである。諸説と比較すると次の如くである。「北魏の図讖禁絶―特に太武帝時について―」（二〇〇七年（平成十九年）三月『大正大学研究紀要』第九十二号）の注(30)に次の如く述べた。「拙論の説は塚本善隆博士の説に疑問を抱き、安居香山博士、佐藤智水先生の説に示唆を得、勘案して気付いて出てきた新説である。つまり、廃仏と図讖禁絶の理由は同一であるものによるものとした独創的な発見の新説である。また、呂宗力博士の説は拙論の新説を知った上で述べられたものである。呂宗力博士の論文の題目から察することのできる主旨に当てはまらない廃仏の理由について明確な言及は、呂宗力博士の論文に見当たらない。因に、拙論の説と諸先生方の説との相違を明確にするために、表にして示してみると次の如くである。」とある。

	塚本善隆説	佐藤智水説	安居香山説	呂宗力説	春本秀雄説
崔浩が廢仏の中心人物である。	○	○	○	-	×
太武帝が中心人物である。	×	×	×	-	○
「魏を滅ぼすものは呉である」という謠言が廢仏の原因となっていると考えられている。	-	○	-	-	○
「魏を滅ぼすものは呉である」という謠言が凶讖禁絶の原因となっていると考えている。	-	-	-	○	○
僧侶と凶讖とが密接な関係にある。	-	-	○	○	○

以上である。

(二) 中国の説

北京大學からの大正大学留學生である孟慶楠<sup>⑬</sup>が紹介した、論者にとって平成二十年四月以前には未聞未見であった、北魏法難についての近年の中国の論文は次の如くである。

- ① 向燕南「北魏太武帝灭佛原因考辨」《北京师范大学学报(社会科学版)》一九九四年第二期。
- ② 栾贵川「北魏太武帝灭佛原因新论」《中国史研究》一九九七年第二期。
- ③ 孙晓莹「浅析北魏太武帝灭佛原因」《当代宗教研究》二〇〇〇年第三期。
- ④ 张箭「论导致北魏灭佛的直接原因暨罪证」《西南民族学院学报(哲学社会科学版)》二〇〇〇年第十二期。
- ⑤ 李春祥「北魏太武帝与周武帝灭佛之异同」《通化师范学院学报》二〇〇一年第二十二卷第三期。
- ⑥ 劉淑芬「從民族史的角度看太武滅佛」《中央研究院歷史語言研究所集刊》二〇〇一年三月。
- ⑦ 李玉芳「北魏太武帝灭佛原因浅析」《宜宾学院学报》二〇〇四年第四卷第一期。
- ⑧ 王勇「太武帝大规模“灭佛”原因初探」《燕北师范学院学报》二〇〇四年第四期。
- ⑨ 陈燕「北魏太武帝崇道抑佛的回顾与反思」《云南民族大学学报(哲学社会科学版)》二〇〇五年第四期。
- ⑩ 王勇「北魏前期佛教文化初探」《晋中学院学报》二〇〇五年第二期。
- ⑪ 肖黎「论北朝的两次灭佛斗争」《河北学刊》一九九二年第一期。
- ⑫ 施光明「北朝的寺院经济和反佛浪潮」《浙江学刊》一九九三年第一期。
- ⑬ 吴平「北朝的兴佛与灭佛」《华夏文化》二〇〇〇年第三期。
- ⑭ 韩毅「对“三武废佛”与佛教寺院地主所有制经济发展道路问题的几点思考」《天水师院学报》二〇〇〇年第二期。
- ⑮ 张箭「三武一宗灭佛研究」四川大学博士论文 二〇〇一年。
- ⑯ 理净「“三武一宗”法难引起的反思」《五台山研究》二〇〇四年第三期。
- ⑰ 袁文良「中国历史上的“三武灭佛”事件」《文史天地》二〇〇七年第八期。

これ等の論文の主張を概ね分類すると次の如くである。

〔1〕蓋異の反乱等の民族起義が北魏政権を転覆しかねない勢力であった為に廃仏が行われた。……(上記の論文の番号の)①・②・④・⑥・⑨・⑮(の論文)。

〔2〕道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廃仏を行った。廃仏の原因を佛道二教の対立と捉える。……(上記の論文の番号の)⑦・⑧・⑨・⑪・⑬・⑰(の論文)。

〔3〕僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廃仏が行われた。……(上記の論文の番号の)③・⑧・⑨・⑫・⑭(の論文)。

〔4〕北魏法難以前の崇佛・崇道の実態……(上記の論文の番号の)⑩(の論文)。

〔5〕論者未見の論文……（上記の論文の番号の）⑤（の論文）。  
以上である。<sup>14</sup>

（三）春本説と中国の説

上述の（一）春本説・（二）中国の説について考え併せると次のような事が言える。

北魏の法難は都合三回あった。（一）太延四年（四三八）……太武帝が五十歳以下の沙門の還俗を命じた。……役・租調との関係。（『魏書』卷四上、世祖紀第四上）・（『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年）……廢仏。（二）太平真君五年（四四四）……太武帝が沙門・師巫（巫覡）の言が人々を惑わすとして私養を根絶すべく禁じた。（『魏書』卷四下、世祖紀第四下）・（『資治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年）……廢仏・凶讖禁絶。（三）太平真君七年（四四六）……太武帝が堂塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡經をみな撃破焚焼すべきこと、及び沙門は少長となく悉く生き埋めにすべきことを命じた。（『魏書』卷百十四、釈老志、太平真君七年三月）・（『高僧伝』卷十曇始伝（大正五十三・三九二中））……廢仏。この北魏の法難の三回の廢仏についての理由は、上記の（一）中国の説に於いて、（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であった為に廢仏が行われた。（二）道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。（三）僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。の三者が廢仏の理由であった。しかし、北魏の太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界觀を持つ新天師道の道教君主であったので、中国の説の（一）・（二）・（三）の理由があつたとしても、完膚無き迄の廢仏を太武帝は行つてはいけなかつたのである。つまり、（一）蓋呉の反乱等の民族起義が北魏政權を転覆しかねない勢力であつた為に廢仏が行われた。のは、論者の新説に於いても蓋呉の反乱等と関係のある仏教寺院等を廢絶する事は勿論、肯定はするのではある。しかし、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廢絶する、完膚無き迄の全国の廢仏を太武帝が行おうとした事は肯定できない事である。何故ならば、太武帝は仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道を尊信する道教君主であつたので、部分的な廢仏は肯定できても完膚無き迄の全国の廢仏をしてはいけなかつたからである。更に、（二）道教君主である北魏太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廢仏を行った。廢仏の原因を佛道二教の対立と捉える。のは、仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道の信仰者であつた太武帝は完膚無き迄の全国の廢仏を行つてはいけない立場であり、佛道二教を対立構造に捉え、それを廢仏の理由とする事は太武帝の信仰する寇謙之の新天師道が如何なる道教であるのかを考慮しない所業である。又更に、（三）僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廢仏が行われた。のは、この理由のみで完膚無き迄の全国の廢仏を太武帝が行おうとした事は仏教を内包した世界觀を持つ寇謙之の新天師道を尊信する道教君主であつた太武帝であつた

事から、考える事のできない事である。以上のように中国の説の〔1〕・〔2〕・〔3〕の廃仏の理由には問題があり、納得する事ができない。

それでは、新説である春本説はどのようなものであるのかをここに要旨のみ簡略に述べると次の如くである。蓋異と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきではあるが、完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝はしてはいけなかった。しかし、完膚無き迄の全国の廃仏は行われた。それは何故か。太武帝は『宋書』索虜伝の「先是虜中謠言、「滅虜者呉也。」熹甚惡之。二十三年、北地澠水蓋異、年二十九、於杏城天台拳兵反虜、諸戎夷普並響應、有衆十余万。熹聞吳反惡其名、累遣軍擊之輒敗。」の「謠言」を封じる為に廃仏を行ったのであると考える。つまり、武功第一の太武帝にとっては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。即ち、「謠言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廃仏を太武帝はしなければならなかったのである。以上の如く新説である春本説は中国の説と全く異なる。

ここに更に、中国の説と新説である春本説とは何処が異なるのかを明瞭にして述べてみると次の如くである。〔1〕……北魏の太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であったので、蓋異の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廃絶すると言う完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝は行う事に躊躇があつたはずである。つまり、北魏政権を転覆しかねない蓋異の反乱等と関係のある仏教寺院等を廃絶する事は太武帝の立場からして当然の事であると考えられる。しかし、蓋異の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廃絶する、完膚無き迄の全国の廃仏を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道の道教君主であった太武帝は行なつてはいけなかつたのである。〔2〕……武功第一の太武帝にとっては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の凶讖に類する謠言を何とかしなければならなかった。つまり、「謠言—凶讖—僧侶—仏教」の密接な連関のもとに、凶讖禁絶と連携して完膚無き迄の廃仏をする必要性が太武帝にはあつた。〔3〕……北魏の法難は廃仏という観点から論ずると、前述の如く、中国の説の〔1〕・〔2〕・〔3〕は【1】の理由によりその説に矛盾が生じてしまい、肯定ができない。しかし、春本説の如く、北魏の法難を凶讖禁絶の側面から論究すると、太武帝・崔浩・寇謙之の三者の考え方の延長線上に矛盾無く、何故完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝が行わなければならなかつたのが明白になる。つまり、北魏の法難を凶讖禁絶の側面から論究すると、【1】の理由があつたとしても【2】の理由により、太武帝は完膚無き迄の全国の廃仏を行わなければならなかつた事になる。〔4〕……北魏太武帝の廃仏と凶讖禁絶は同じ時期に行われ、その行われた理由は凶讖禁絶が「主」で廃仏は「従」の力関係の間柄に於いて行われたのである。以上の四点が新説である春本説の主たるものであり、中国の説と異なる点である。

因みに、日本の説と中国の説とで大きく異なる点がある。それは次の如くである。日本に於いては、北魏太武帝の廃仏については塚本善隆先生の論文「北魏太武帝の廃仏毀釈」（『支那仏教史学』一—四 一九三七年（昭和十二年））、『塚本善隆著作集』第二卷第二章）に「北魏太武帝の廃仏の中心人物は崔浩である」旨述べられている。安居香山先生「漢魏六朝時代における凶讖と仏教—特に僧伝を中心として—」（『二 凶讖禁絶の歴史』安



居香山・中村璋八著『緯書の基礎的研究』 国書刊行会 一九七六年（昭和五十一年）も「太平真君七年の廢仏なども、漢族士大夫階級の崔浩の政治的進出、と言う直接原因……」と述べて塚本先生の説を「是」として述べられている。更に、横超慧日先生の論文「北魏仏教の基本的課題」（横超慧日編『北魏仏教の研究』第一篇 思想編 一九七〇年（昭和四十五年））にも、「たまたま蓋呉の反を以て閔中が騒動した機会に、沙門が蓋呉と通謀しているのではないかとの嫌疑から、教団に対して大弾圧が加えられる端緒が作られた。かねて帝室に帰依せられていた道教の中に道士寇謙之という人物が現われ、且つこれを信奉する司徒崔浩が排仏論を主張したため、禍乱平定に急なる太武帝の心はこれによって動かされた。そしてその結果が、仏教の虚誕妖孽という非難により定着後日なお浅い信仰界に一大衝撃を与える大事件となったのであって、沙門は少長となく悉く之を坑にせよという詔となつて現実化したのである。時に太平真君七年（四四六）のことであり、これが史上三武一宗の法難と言われる第一次の廢仏事件である。」とあり、崔浩が排仏論を主張したために太武帝の心は動かされ廢仏事件がおきたのだとしている。これも塚本善隆先生の説を「是」として踏まえて述べている。更に、鎌田茂雄著『中国仏教史』第三卷、第四章、北朝の仏教、第二節、北魏の廢仏（東京大学出版会 一九八四年（昭和五十九年））に、「廢仏を進言し、それを推進した中心人物は崔浩であつた」、「崔浩が太武帝に推薦し、太武帝をして道教を重んじる天子に変え、廢仏に踏みきらせるために利用されたのが寇謙之である」とある。鎌田茂雄先生も塚本善隆先生、安居香山先生や横超慧日先生と同様に考えているのである。更に、本論考「一叙」で述べた、藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』（白帝社 二〇〇四年十月一日 白帝社アジア史選書〇〇五）の八頁の「鮮卑族がたてた北魏の、太武帝によってひき起こされた廢仏は、儒教にもとづく政治を理想とし、人一倍の仏教嫌いであつた門閥出身の宰相崔浩が、天師道教の寇謙之と手をむすんで太武帝を籠絡し、太平真君の元号からも分るようになり、道教君主に仕立てあげた成果である。」も「崔浩が、寇謙之と手をむすんで太武帝を籠絡し、道教君主に仕立てあげた成果である。」として「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」としている。このように、日本に於いては塚本善隆先生の論文「北魏太武帝の廢仏毀釈」（『支那仏教史学』一四 一九三七年（昭和十二年）、『塚本善隆著作集』第二卷第二章）により「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」旨が述べられていて、これが定説となつて諸研究者の諸本に述べられているのが現状である。しかし、中国の諸説に於いては「北魏太武帝の廢仏の中心人物は崔浩である」旨述べている論文は無い。因みに論者の説も塚本善隆先生の説に疑問を持ち、これまでに塚本善隆先生の説を「非」として春本説を述べて来た。従つて、この点に於いては中国の諸説と春本説とは同様であると言える。

## 五 結

「三武一宗の法難」の称谓の初出は不詳であるが、論者の調べた所では、『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会 一九三三年（昭和七））に「三武一

宗法難（サンブイツソウノホウナン）」の項目がある。今回これ以前には「三武一宗の法難」の称謂を見出す事はできなかった。「三武一宗」と言うのならば「二武二宗」と言っても可である。論理的には本来は「三武一世の法難」とすべきであると考える。しかし、本論考においては一応、便宜上「三武一宗の法難」と称謂しておく。

「三武一宗の法難」の第一番目に相当する「北魏の法難」は本論考によれば、(一) 叙に記した藤善眞澄著『隋唐時代の仏教と社会 弾圧の狭間にて』（白帝社 二〇〇四年十月一日 白帝社アジア史選書〇〇五）の八・九頁にあるようではなかった。つまり、北魏太武帝の廃仏は、為政者である太武帝に廃仏の思想がなく、仏教を内包した世界観を持つ新天師道の信仰者である太武帝は、どちらかと言えば仏教養護派なのであるから、側近の崔浩がいくら廃仏、廃仏と唱えてみても、それが易々と受け入れられるものではない。逆に、廃仏を崔浩が太武帝に進言すれば進言する程、太武帝にとってはその言を受け入れるよりも崔浩を失脚させようとする方向に気持ちが傾かずである。そのような関連があるにもかかわらず崔浩の進言の通りに廃仏が行われたのは、その進言を聞き入れた太武帝に崔浩の進言以外に廃仏断行の強い理由、意思があったからに他ならないのである。つまり、それは何か、とやうことを崔浩、寇謙之、太武帝の考え方を明確にして、それぞれの関係を考え、突き詰めていくと、武功第一の太武帝にとつては、「魏を滅ぼすものは呉である」の謠言が許せなかつたというところに行き着く。蓋異と通謀していた長安の一寺院は壊滅して然るべきはずであるが、一寺院だけに止まらず、仏教全てを廃棄したのは崔浩の進言があつたとは言うもののそれが決定的な理由ではない。仏教を内包した世界観を持つ新天師道を信仰する君主であつた太武帝が廃仏の断を下したのであり、それは太武帝自身の武功を第一に考える太武帝の決断によつてなされたのである。ここに廃仏の行われた真の決定的理由があるのである。崔浩の進言により廃仏が行われたのではなく、太武帝自身に廃仏を行わなければならない理由があつたので廃仏が行われたのである。つまり、太武帝の側近である崔浩は太武帝の廃仏断行の後押しをした形なのである。従つて前述の藤善眞澄先生が「鮮卑族がたてた北魏の、太武帝によつてひき起こされた廃仏は、儒教にもとづく政治を理想とし、人一倍の仏教嫌いでとうした門閥出身の宰相崔浩が、天師道教の寇謙之と手をむすんで太武帝を籠絡し、太平真君の元号からも分るように、道教君主に仕立てあげた成果である。」とだけ言っているのは正鵠を射ていないことになる。更に、北魏の法難は都合三回行われた。(一) 太延四年(四三八)……太武帝が五十歳以下の沙門の還俗を命じた。(『魏書』卷四上、世祖紀第四上・『資治通鑑』卷百二十三、宋紀五、文帝元嘉十五年)。(二) 太平真君五年(四四四)……太武帝が沙門・師巫(巫覡)の妖怪の言を禁じ、更に沙門・師巫(巫覡)の私養を禁じた。(『魏書』卷四下、世祖紀第四下・『資治通鑑』卷百二十四、宋紀六、文帝元嘉二十一年)。(三) 太平真君七年(四四六)……太武帝が塔塔伽藍を悉く破却して仏図及び胡經をみな撃破焚燒すべきこと、及び沙門は少長となく悉く生き埋めにするべきことを命じた。(『魏書』卷百十四、積老志、太平真君七年三月・『高僧伝』卷十曇始伝(大正五十三・三九二中))の以上の三回である。この事から、前述の藤善眞澄先生が「それほどまでの悪評を巻きおこし、仏教徒に衝撃をあたえ反感を招いた最初の廃仏棄積も、徹底的に破壊されたように記されているわりには、どれほどの寺院が毀たれ、僧尼が還俗となつたかは一切が不明なのである。当時の北魏は山東・河南まで制圧していたけれども、

都がはるか北辺の平城（へいじょう）、現在の山西省大同に置かれていたことを思えば、具体的には疑問が残るのである。」と述べられているが、「徹底的に破壊された」と理解することが妥当であると本論考に於いては考える。しかし、藤善眞澄先生の御指摘のように、「一切が不明」・「当時の北魏は山東・河南まで制圧していたけれども、都がはるか北辺の平城、現在の山西省大同に置かれていたことを思えば、具体的には疑問が残るのである。」とするのも一理ありとは考え得ると考えている。更に、「三武の法難」には、①北魏、太武帝……寇謙之（道士）・謠言（図讖）。②北周、武帝（建德三年（五七四）……張賓（道士）・讖言（図讖）。③唐、武宗（会昌五年（八四五）……趙歸真（道士）・図讖。の）のように、奇しくもそれぞれに「道士・図讖」との関係があった。つまり、「道士」は「道教」、「図讖」は「儒教」との関係があるのである。このような「三武の法難」に共通して認められる「道士・図讖」の本論考に於いて指摘し明確にし得た。更に、近年の中国の論文との相違を明確にして春本説と同様の説は存在しなかった。近年の中国の論文の主張する所はそれぞれ異なるのはあるが、春本説と近年の中国の論文との相違を明確にして春本説を述べると次の如くである。①……北魏の太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であったので、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廃絶すると言う完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝は行う事に躊躇があつたはずである。つまり、北魏政権を転覆しかねない蓋呉の反乱等と関係のある仏教寺院等を廃絶する事は太武帝の立場からして当然の事であると考えられる。しかし、蓋呉の反乱等と関係のない仏教寺院等をも廃絶する、完膚無き迄の全国の廃仏を仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道の道教君主であった太武帝は行なつてはいけなかつたのである。②……武功第一の太武帝にとっては、民族起義を鎮圧する為に、「滅虜者呉也（虜（魏）を滅ぼすものは呉なり）」の図讖に類する謠言を何とかしなければならなかつた。つまり、「謠言―図讖―僧侶―仏教」の密接な連関のもとに、図讖禁絶と連携して完膚無き迄の廃仏をする必要性が太武帝にはあつた。③……北魏の法難は廃仏という観点から論究すると、本論考「四 春本説と中国の説」の「三」春本説と中国の説」で述べた如く、中国の説の「①」・「②」・「③」は【①】の理由によりその説に矛盾が生じてしまい、肯定ができない。しかし、春本説の如く、北魏の法難を図讖禁絶の側面から論究すると、太武帝・崔浩・寇謙之の三者の考え方の延長線上に矛盾無く、何故完膚無き迄の全国の廃仏を太武帝が行わなければならなかつたのが明白になる。つまり、北魏の法難を図讖禁絶の側面から論究すると、【①】の理由があつたとしても【②】の理由により、太武帝は完膚無き迄の全国の廃仏を行わなければならなかつた事になる。④……北魏太武帝の廃仏と図讖禁絶は同じ時期に行われ、その行われた理由は図讖禁絶が「主」で廃仏は「従」の力関係の間柄に於いて行われたのである。⑤以上である。

総じて、新説である春本説の独創的な点は二点あつて、次の如くである。

- ① 日本において定説となつている塚本善隆先生の「北魏太武帝の廃仏の中心人物は崔浩である。」との説を春本説では、「非」とし、「北魏太武帝の廃仏の中心人物は太武帝自身である。」とした。塚本善隆先生の説と春本説との相違を明確にする為に表にすると次の如くである。

	塚本説	春本説
太武帝の廃仏への働きかけの強さ	○	◎
崔浩の廃仏への貢献度	◎	○
寇謙之の廃仏への意思	△	△

10

② 中国の説に於いては、北魏政権を転覆しかねない勢力であった蓋呉の反乱等における鎮庄の為に廃仏と凶讖禁絶が行われた。更に、道教君主である太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廃仏を行ったとした、廃仏の原因を佛道二教の対立と捉えたり、並びに、僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫の理由により廃仏が行われたとした。従って、廃仏と凶讖禁絶の関係は民族起義に於ける鎮庄の為に行われたものであり、そこには「主」・「従」の関係は存在しない。これに対して、春本説では、北魏太武帝の廃仏と凶讖禁絶は同じ時期に行われ、その行われた理由は、道教君主である太武帝にとっては寇謙之の嫌がる完膚無きまでの廃仏を行えなかつたとし、しかし、北魏政権を転覆しかねない勢力であった蓋呉の反乱等の民族起義における鎮庄の為に凶讖禁絶は行わなければならないので、完膚無き廃仏にまで及んだのだとした。従って、凶讖禁絶が「主」で廃仏は「従」の力関係の間柄に於いて凶讖禁絶と廃仏と同じ時期に行われたとした。中国の説と春本説との相違を明確にする為に表にすると次の如くである。

	中国の説	春本説
北魏政権を転覆しかねない勢力であった蓋呉の反乱等の民族起義と関係の無い仏教を太武帝は廃棄してはいけなかった。	-	○
道教君主である太武帝の政治と相反する仏教の勢力に対して、宰相崔浩の助言にもより太武帝は廃仏を行った。廃仏の原因を佛道二教の対立と捉える。	○	△
僧尼の増加等による北魏社会経済への圧迫により廃仏が行われた。	○	△
太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であったので廃仏を行ってはいけなかった。	-	○
凶讖禁絶を行う事は、完膚無き廃仏をする事を含んでいる。	-	○
凶讖禁絶が「主」で廃仏は「従」。	×	○

以上である。

新説である春本説を端的に言えば次の如くである。

つまり、〈太武帝は廃仏をしたかったのでは無くして凶讖禁絶をしたかったのである〉。その凶讖禁絶をすると言う事は完膚無き廃仏をする事を含んでいると言うのが北魏法難の実態なのである。

ここに従来の諸論諸説とは異なる、新説である春本説の独自性がある。

上述の如く、今回、論者がこれまでに未聞未見だった諸研究文献資料をもとに、これまでの中国の説を含む従来の定説等と春本説とを比較検討して、新説である春本説の妥当性を論じた。しかし、本論考に於いて論者の思い込みや論者の思量を超えた思わぬ盲点が全く無いとは言えないとも考えている。より確かな論にすべく江湖の御批判御叱正を願ひ、ここに擱筆する<sup>(18)</sup>。以上。



- (1) 「北魏の凶讖禁絶―特に太武帝時について―」(平成十九年三月『大正大学研究紀要』第九十二輯)の註(2)参照。
- (2) 平成二十年三月十四日(金)に平成十九年度浄土宗教学院(東部)研究会(浄土宗教学院 Ⅱ075-525-0480)が浄土宗宗務庁(東京第二会議室 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内)で行われ、論者は「北魏法難の研究」と題して口頭発表をした。その時の質疑応答の際にこの本書の存在する事の指摘が聴衆の研究員の方から述べられた。この時以前には論者は本書の存在を知り得ていなかった。
- (3) 平成二十年四月二十五日(金)六時限目の論者担当の「東洋文献講読B-1」の講義の時に北京大学からの留学生の孟慶楠(大正大学文学部歴史化学科 短期(平成十九年四月から平成二十年八月) 留学生 0709011……: 北京大学哲学研究所中国哲学修士課程二年)に、北魏の廢仏についての近年の中国の論文があれば紹介して欲しい旨告げた。孟慶楠は平成二十年五月九日(金)に北京大学図書館で論文検索したペイパーを持って来た。その論文名の一部を、本論考「四春本説と中国の説 (二) 中国の説」に掲げた。ここに掲げた論文名のほとんどの論文を孟慶楠は論者に提供した。ここに感謝する。次号の(平成二十二年三月『大正大学研究紀要』第九十五輯)に於いて、「(仮題) 中国に於ける北魏法難の研究」と題して孟慶楠の提示した論文について詳考する予定である。本論考の提出当初の原稿には既に孟慶楠が提示提供した論者にとって平成二十年四月以前に未聞未見であった近年の中国の論文についての論考原稿が存在していたのであるが、本論考所載の規定による紙幅の制限により、割愛せざるを負

えなかった。次号掲載予定である事をここに記しておく。

- (4) 先に、平成十九年二月一日に新纂浄土宗大辞典編纂委員長の石上善應先生・同副委員長の伊藤唯真先生より『新纂浄土宗大辞典』項目執筆の依頼があった。論者に与えられた執筆項目は「三武一宗の法難」であった。その時の成果を踏まえてここに「三武一宗の法難」と「北魏の法難」について述べた。因みに、従来の『浄土宗大辞典』、『三武一宗の法難』の項目には次の如くあった。「中国に仏教が流伝してから、いくたびか時の権力者による仏教排撃が実施された。その中でも(一)北魏太武帝(二)北周の武帝(三)唐の武宗(四)後周の世宗による廢仏がとくに激甚をきわめたので、あわせて三武一宗の法難と称するのである。(一)北魏の太武帝は漢人宰相崔浩とともに道士寇謙之に帰信して、長安の仏寺に武器が隠匿され婦女が雜居し釀酒の事ありとして、仏教教団の墮落を責めて破仏を行なったのは四四六年(太平真君七)であり、『魏書釈老志』にも詳しく述べている。(二)北周の武帝も道士張寶や還俗僧衛元嵩らによつて仏道二教がともに五七三年(建德三)に降廢されることになったが、三〇〇万の僧道は還俗せられ、堂舎・仏像・經典とともに破却された。(三)唐の武宗も道教を尊崇して仏教の排撃を八四五年(会昌五)に断行した。たまたま長安に留学していた円仁の『入唐求法巡礼行記』には詳しく記録されている。(四)後周の世宗は主として国内政治の観点から、九五五年(顕徳二)、仏教教団の肅正に着手し三三三六所の寺院を廢したという。これらの大廢仏も、漢胡両民族の葛藤・仏道二教の確執・国内政治の動向などの原因はあったが、その直後に仏教の復興を来すこととなったのは周知のところである。」。これに対して、次の如く新規『新纂

浄土宗大辞典』の「三武一宗の法難」の項目の春本の原稿（平成十九年三月三十一日）とした。「中国仏教史上、四回の廃仏が行なわれた。」

①北魏、太武帝、太平真君五年（四四四）、太平真君七年（四四六）

②北周、武帝、建德三年（五七四）

③唐、武宗、会昌五年（八四五）

④後周、世宗、顯徳二年（九五五）である。①北魏の太武帝の廃仏は、武功第一の太武帝にとっては「滅虜（魏）者呉也。」（『宋書』索虜伝）の図讖に類する謠言を何とかしなければならなかったため、「謠言―図讖―僧侶―仏教」の密接な連関のもとに、図讖禁絶と連携して寇謙之（道士）の好まない完膚無きまでの廃仏が行われた。②北周の武帝の廃仏は、武帝が「黒衣當王。」（『集古今佛道論衡』卷乙）の讖言により仏教を嫌っている所に、張賓（道士）が「以黒釈為苦國忌、以黄老為國祥。」（『廣弘明集』卷第八）として、衛元嵩（還俗僧）と共に進言した事に起因する。武帝は有徳の衆僧、名儒道士、文武百官に三教の優劣を論じさせ、張賓・智炫（法師）の論争を経て、仏・道二教を共に廃した。③唐の武宗の廃仏は、武宗が夙に道教を尊信しており、最期は仙薬を飲んだ為に崩じてしまった程の道教信仰者であった事に起因する。趙歸真（道士）は「孔子説云。李氏十八子。昌運方盡。便有黒衣天子。理国。」（『大唐求法巡礼記』卷第四）との図讖を奏言し、武宗はこれをも憎み李徳裕（宰相）等により廃仏が行われた。④後周の世宗の廃仏は、前者の三つの廃仏とは異なり、主に僧侶の墮落・経済的な理由により世宗の富国強兵策として仏教統制が行われた。尚、「三武一宗の法難」の称谓の初出は不明。「三武一宗」なら「二武二宗」でも可とすべき。論理的には本来は「三武一世の法難」と称谓すべき。因みに、北宋、張商英述『護法論』に「三武」、南宋、志磐撰『佛祖

- 統紀』巻第四十二に四時の廃仏の事が述べられている。参考春本秀雄「北魏法難の研究文献（一）―付廃仏関係論文資料―」（『佛教文化研究』第四十四号）。春本秀雄「北魏の図讖禁絶―特に太武帝時について―」（『大正大学研究紀要』第九十二号）。800字（春本秀雄）以上である。「三武一宗の法難」についての参考文献は次の如くである。「塚本善隆「中国の仏教迫害（三武一宗の廃仏）」（『講座仏教Ⅳ 中国の仏教』大蔵出版株式会社）・柴田道賢『廃仏毀釈』（公論社、昭和53年）。本論考に於いては、新規『新纂浄土宗大辞典』の「三武一宗の法難」の項目の春本の原稿（平成十九年三月三十一日）に於いて、「①北魏、太武帝、太平真君五年（四四四）、太平真君七年（四四六）」としたのに対して、「①北魏、太武帝、太延四年（四三八）、太平真君五年（四四四）、太平真君七年（四四六）」とした点が相違する。
- (5) 参考文献は次の如くである。「春本秀雄「北魏法難の研究（1・2・3・4・5・6・7）」（『仏教論叢』第38・39・40・41・42・43・44号）。「春本秀雄「北魏の図讖禁絶―特に太武帝時について―」（『大正大学研究紀要』第92号）。「春本秀雄「北魏法難の研究文献（一）―付廃仏関係論文資料―」（『佛教文化研究』第44号）。「塚本善隆「北魏太武帝の廃仏毀釈」（『支那仏教史学』一―四一九三七年（昭和十二年））。「佐藤智水「北魏廃仏論序説」（『岡山大学法文学部学術紀要史学篇』三十九一九七九年（昭和五十四年））。「久保田量遠著『支那儒道仏三教史論』（東方書院一九三二年（昭和六年））。
- (6) 参考文献は次の如くである。「塚本善隆「北周の廃仏について」（『東方学報』京都16・18）。「野村耀昌『周武法難の研究』（東出版）。
- (7) 参考文献は次の如くである。「亀川教信「会昌の廃仏について」（『支

那仏教史学』6—1)。「道端良秀『武宗の廃仏事件』(『唐代仏教史の研究』、一九五七)」。

(8) 参考文献は次の如くである。「牧田諦亮『後周世宗の仏教政策』(『東洋史研究』10—13)」。・「畑中淨円『後周世宗の廃仏考』(『大谷学報』23—4)」。

(9) 「三武一宗の法難」の呼称について調べてみると次の如くである。①『護法論』(北宋 張商英)……「三武」。②『仏祖統紀』(南宋 志磐)……卷第四十二に四時の廃仏の事が述べられている。③『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行協会 一九三二年(昭和七))……「三武一宗法難(サンブイツソウノホウナン)」。④『東洋歴史大辞典』(平凡社 一九三七年(昭和十二年)……「三武一宗」。⑤『大漢和辞典』(大修館書店 一九五五年(昭和三十年)……「三武一宗厄(サンブイツソウノヤク)」。⑥『広辞苑』(岩波書店 一九五五年(昭和三十年)……「三武一宗」。⑦『アジア歴史事典』(平凡社 一九六〇年(昭和三十五年)……「三武一宗の法難」。⑧『漢語大詞典』(上海辞書出版社 一九八六年(昭和六十一年)……「三武」「三武之難」。⑨『中国歴史文化事典』(新潮社 一九九八年(平成十年)……「三武の滅仏」。以上の事から次の如く言えると考えている。中国に於いては歴史的にその古典に於いて「三武一宗」の呼称が見当たらない。日本に於ける③『望月仏教大辞典』(世界聖典刊行協会 一九三二年(昭和七年)……「三武一宗法難(サンブイツソウノホウナン)」が「三武一宗」の呼称の嚆矢となるものであろうか。

(1) 参照。

(11) 柴田道賢著『廃仏毀釈』(公論社、昭和五十三年)の三十三頁に、

北魏法難の実態解明について

「……四三八年には五十歳以下(元文「以上」)の僧侶の還俗を命じ、四四四年には、沙門の妖怪の言を禁じ、沙門を私養することを禁じ、四四六年に至つて、堂塔伽藍を悉く破却し、仏図及び胡経をみな撃破焚焼すべきこと及び沙門は少長となく、悉く生き埋めにすべきことを命じた……」とある。更に、(注 四) 参照。

(12) (1) 参照。また、本論考の(四 春本説と中国の説 (一) 春本説)は主に、「(『緯書研究』とその展開—中国学へのベクトルと復活—(平成十八年四月「加地伸行博士古稀記念論集 中国学へのベクトル」研文出版)・(『北魏の凶讖禁絶—特に太武帝時について—(平成十九年三月『大正大学研究紀要』第九十二号)の記述を引用して纏めて述べた。

(3) 参照。

(14) 詳細は次号の(平成二十二年三月『大正大学研究紀要』第九十五輯)に於いて、「(仮題) 中国に於ける北魏法難の研究」と題して論ずる予定である。本論考の提出当初の原稿には既に論者にとつて平成二十年四月以前に未聞未見であった近年の中国の論文についての原稿が存在していたのではあるが、紙幅の関係上、割愛せざるをえず次号掲載予定となった。(3) 参照。

(9) 参照。

(16) この表は、塚本善隆先生の説の「北魏太武帝の廃仏の中心人物は崔浩であり、仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道を尊信する道教君主である太武帝や寇謙之は必ずしも廃仏には賛成の意見を持っていなかった。」事を意味している。日本に於いてはこの塚本善隆先生の説を「是」とし、定説となっている。しかし、春本説では塚本善隆先生の説を「非」とし、「北魏太武帝の廃仏の中心人物は太武帝自

身であり、漢人宰相の崔浩が胡教である仏教を廃棄しようとしたのは当然の事であるが、太武帝は仏教を内包した世界観を持つ寇謙之の新天師道は完膚無きまでの廃仏には反対の考えを持っていた。」とした。この意をこの表で示した。

- (17) 春本説に於いては、「凶讖禁絶を行う事は、完膚無き廃仏をする事を含んでいる。」と考える。しかし、更に、「太武帝は寇謙之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であったので廃仏を行つてはいけなかった。」とも考えるので、太武帝は凶讖禁絶は行つても廃仏を行つてはいけなかったのではないかと言う可能性が考えられる。しかし、北魏政権を転覆しかねない勢力であった蓋呉の反乱等の民族起义の鎮圧の為に凶讖禁絶を行なうのであるから、北魏の太武帝が寇謙

- 之の仏教を内包した世界観を持つ新天師道の道教君主であっても、凶讖禁絶、それと連携した完膚無き廃仏を行う事は已むを得なかった事と考える。つまり、へ太武帝は廃仏をしたかたつたのでは無くて凶讖禁絶をしたかたつたのである。その凶讖禁絶をすると言う事は完膚無き廃仏をする事を含んでいると言うのが北魏法難の実態なのである。ここに従来の諸論諸説とは異なる、新説である春本説の独自性がある
- (18) 論者には(1)にあるが如くの諸拙論の主張を纏め、これまでの定説とは異なる、新説である春本説の提示をした単著『北魏法難の研究』(汲古書院 平成十四年(二〇〇二年) 私家版) が既にある。本論考の成果も取り入れて、後に改訂して江湖の御批判御叱正を乞うべく、世に問いたいと考えている。